自由人の舌打ち

vol.45

野宿先、逃亡先

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

自分が居心地よく暮らせる生息域すなわち「ニッチ」を求めて、東京都心から郊外へとさまよう男の物語を書いた時の一つのテーマは、野宿できる場所を探すというものだった。いざホームレスや逃亡者となり、行き場所を失った時に、何処に身を置くか、それは結構深刻な問題である。

主人公は中野で所持金が尽き、初めて野宿を体験するのだが、実際に中野をフィールドワークし、実践もしてみた。刑務所の跡地の「平和の森公園」は縄文時代から弥生時代の住居跡が発見されていて、竪穴式住居が一棟復元されている。その復元住居で寝られたらよかったが、鍵がかかっていたので公園内の防火樹林で野宿した。以前、ドイツを一人旅した時もある町のホテルがどこも満室で、行き場がなくなり、駅の待合室で寝ようとしたものの、駅員に追い出され、やむなく公園の植え込みに紛れて夜明けを待ったことがあった。最初のうちは人の気配や物音に敏感になり、寝付けなかったが、「もうどうにでもなれ」と半ばやけになり、自分を生贄としてその町に差し出す気になったら、その場が自分に馴染んできた。ディオゲネスは貨幣偽造の罪で故郷を追放され、辿り着いた先のアテネでホームレスをやっていたが、「お前は何様だ」と問かれ、「世界市民だ」と答えたとか。いわば、難民や国際人の走りだが、そういう立場の者を抑圧せず、身を置く場所を提供してくれる町に暮らしたい。

都心部は監視カメラだらけで、路上で寝たり、宴会を始めたりすると、たちまち警官が来て尋問される。同質化が進んだ空間では、異質な存在は速やかに排除される。国内で逃亡生活を行う場合、何処に逃げ込むのが有利か考えたことがあったが、その時興味を持ったのは、英会話教師を殺害して長期間逃亡した市橋達也の逃走ルートだった。彼は日本中を転々としていたが、一時期、久米島に程近いオーハ島に潜伏していた。老人が島らっきょうを作りながら細々と暮らしている鄙(ひな)びた島だが、怪しいよそ者であっても振る舞い方しだいで潜伏できる土地がまだ日本にはあると知り、目下逃亡予定はないが、安心した。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授